

始



明治十六年八月

不發賣

愛知縣勸業雜誌

第五號

勸業課印行

東國通商

勸業雜誌

第五號

目次

製茶論言

蟲害論言

產馬改良頌末

郵便報告

船舶報告

宮重大根種販賣廣告

宮重大根栽培法

農談會報告

山林共進會受賞者履歷ノ概畧

〔次號續出〕

東國通商

製茶論言

本縣達乙第六十一号

今回米國ニ於テ贖製茶輸入制禁條例發布ノ聞有之候ニ付テハ貿易上關係不少儀ニ付農務局ヨリ照會ノ次第モ有之候條該業者ニ於テハ別紙之旨趣ニ據リ精々注意致候様懇諭可致此旨相達候事

明治十六年四月十七日

愛知縣令國貞廉平

〔別紙〕

茶業者ノ注意

往時本邦茶園未タ多カラサリシ頃ニ於テハ需用ノ急ナルニ際シ茶葉中ニ柳葉或ハ枸杞葉ナドヲ以テ混合セシモノ

アリシカ近來我茶ノ信用海外ニ失ヒ供給ノ高需用ニ超過シ從テ價格ヲ落シ其勞費ノ償ハザルヨリ却テ茶樹ヲ拔去リ他ノ作物ニ換ヘントスルノ景况ナレバ復他物ヲ雜フルガ如キ迂遠ノ贖造者ハナカルベシト雖モ猶大ニ憂フベキモノアリ即チ日乾粗製及ヒ乾燥貯藏荷造等ノ完全ナラザルヨリ固有ノ香味色澤ヲ變敗セシムル是レナリ又外國商人ハ徒ニ其外貌ヲ飾リ奇利ヲ射ンガ爲メ支那綠茶ノ製ニ倣ヒ藥品ヲ用ヒテ粗製茶ニ着色シ今ヤ恬トシテ恠マズ却テ今日普通ノ事トナルニ至レリ

貿易ノ初メニ當リテハ此等ノ弊寡ナカリシガ故ニ我製茶ハ大ニ米國消費者ニ愛賞セラレ生産者ハ從テ良製ニ盡力シテ怠ラザリシモ近來外商輩ガ競テ粗製茶ニ着色シ消費

者ヲ欺ントスルヨリ其購買スル所ノ茶葉ノ價精粗常ニ權
衡ヲ失ヒ精製ノ利ハ却テ粗製ノ益ニ迫ハズ然レドモ他ニ
販途ナキヲ以テ已ムヲ得ズ居留外商ニ放賣セリ而シテ
我茶商ハ其消費者ノ信用如何ヲ知ルニ由ナク徒ニ其損失
ヲ補ハンヲ欲シテ精製茶ニ日乾等ノ粗製ヲ混合シ或ハ
斤量ヲ減センヲ惜ミテ仕上ケ乾燥ヲ粗漏ニナシ或ハ競
賣ヲ事トシテ貯藏荷造ヲ不完全ナラシメ一時ノ僥倖ヲ博
セント欲シテ却テ緊要ナル香味色澤ヲ變敗セシメ非常ノ
損害ヲ招クガ如キ比々皆是ナリ外商ハ之ニ乘シテ益廉價
ニ之ヲ購求シ巧ニ着色シテ精品ニ混合シ消費者ヲ欺クノ
手段ヲナセルニヨリ愈我茶ノ信用ヲ失ヒ輸額ヲ減少スル
ニ至ル

抑價製茶ノ人生ニ害アル固ヨリ論ヲ俟タズ英國ニ於テハ
曩ニ條例ヲ發行シ藥品ヲ用ヒテ着色セル綠茶ノ輸入ヲ禁
セリ着色少量ヲ濠洲ウイクトリヤ洲ニ於テモ亦昨十五年
二月已ニ此制ヲ設ケタリ着色制限アリ然ルニ我製茶ヲ消費スル
米國ニ於テ何故是迄之ヲ緩慢ニ附セシカヲ怪ミタリシガ
今ヤ左ノ報ヲ獲タリ

價製茶輸入制禁條例

第一條 一千八百八十三年七月一日以往價製茶ヲ合衆國
ニ賣捌ノ爲メ輸入スルヲ禁スヘシ
第二條 凡テ茶葉及ヒ茶ト稱スル他葉トモ外國ヨリ輸入
スルニ當テハ通關前ニ送品目錄ニ記載ノ通り其品質純
粹ナルヤ否ヤヲ檢査シ及其價格ヲ鑑定スヘシ

第三條 右検査ニ於テ茶葉ニ雜品ノ贗造物アルヲ發見シ
 分析ノ上飲用ニ適セザル危害物ト認ムルトキハ其實
 ナ送品目錄ニ記載スヘシ此ノ如ク有害ナルヲ記載シ
 タル送品目錄ニ對スル茶或ハ茶ト稱スル他葉トモ持主
 又ハ荷受主ニ於テ再ヒ其検査ヲ出願スルヲ得ヘケレド
 前検査ノ誤リナルヲ發見スルニ非サルヨリハ決シテ其
 通關ヲ許サルヘシ

第四條 再検査ニ於テ愈々贗造物ナルヲ發見セシトキ
 ハ其茶ハ税關ニ留置クヘシ但シ持主又ハ荷受主ハ合衆
 國ニテ生シタル倉敷及其他ノ雜費ヲ支拂ヒ充分ナル保
 証ヲ立ツルニ於テハ再検査後六ケ月中ハ合衆國外へ再
 出スルヲ得ヘキモ其期限ヲ經過スル片ハ税關官吏ハ其

物品ヲ沒滅シ持主又ハ荷受ヨリ再輸出ニカ、ルヘキ諸
 入費ヲ合衆國ニ對シ辨償セシムヘシ

第五條 茶質検査反ヒ價格鑑定ハ其輸入港ノ品評官之ヲ
 爲スヘシ又品評官無之港ニ於テハ租稅吏之ヲナスヘシ
 但大藏卿ノ差圖アルキハ此限ニ非ス

此條例若シ發布セハ本年七月一日ヨリ之ヲ實施シ嚴ニ濫
 惡茶ヲ防遏シテ其跡ヲ絶タントスルモノ、如シ恰モ是レ
 我茶ノ輸出季節ニ當レリ當業者タルモノ宜シク專心以テ
 惡弊ヲ一洗シ益々日本茶ノ隆盛進殖ヲ圖ルヘシ去ル十三
 リ我純粹ナル本色茶ハ稍其輸出額ヲ增加シ既ニ昨年十五
 ニ及ンテハ輸出總額凡三分ノ一即一千万斤ヲ輸出セシニ
 アラ若シ今日ニシテ猶之カ改良ヲ怠ラハ内ハ以テ不測ノ
 損敗ヲ來シ外ハ以テ我國產ノ聲價ヲ失ヒ遂ニ復挽回ノ期

ナキニ至ラントス豈猛省セサルヘケンヤ因テ左ニ改良ノ
要點ヲ示シ以テ當業者ノ特ニ注意センコトヲ望ム
第一 培養摘葉ニ注意シ茶ノ香味色澤ヲ佳長ナラシムル
事

第二 乾茶ヲ止メ他ノ便利ナル製法ニ改良スル事
第三 仕上乾燥ヲ十全ナラシムヘキ事

附乾燥器ヲ改良スル事

第四 貯藏ヲ精密ニシ荷造ヲ完全ナラシメ變味變色ヲ防
グ事

明治十六年 農務局

農務局臨時報蟲害豫防論言

古ヨリ農家ノ慘毒ヲ被ルモノハ天災ト蟲害ナリ天災ハ人
力ニテ防シコト能ハサルモノナレトモ蟲害ハ注意ト盡力
トニヨリテソノ害ヲ免ルコトヲ得ヘシ諸植物ヲ害フ蟲類
ハ其數甚夥ケレトモ就中大害ヲナスモノハ禾穀ヲ害フ螟
蟲浮塵子蔬菜ヲ害フ地蠶菜蟲菽類ヲ害フ金龜蟲樹木ヲ害
フ粘蝨蚜蟲ノ類ニシテ人々能ク知ル所ナリ而シテ此害蟲
ノ生スルハ皆其母蟲アリテコレヲ産モノナレハ各自宜ク
注意テ其豫防方ニ盡力セサルヘカラス然ニ僻邑遠陬ニ至
リテハ往々此ヲ度外視テ意ヲ留ズ一旦蟲勢猖獗ノ狀ヲ見
テ始テ其怖ルベキコトヲ覺ルモ未ダ其蟲ノ生スル理由ヲ
知ラス或ハ氣候ノ爲ナリト云ヒ或ハ他物ノ化スルナリト
云フガ如キ皆之ヲ天災ナリト思ヒ到底人力ニテハ防グコ

ト能ハサルモノトシ之ヲ鬼神ニ祈リ或ハ巫祝ニ託シ又ハ
蟲送ト稱ヘ金鼓ヲ鳴シ田圃ノ間チ狂奔テ此上モナキ良策
ト心得居ルモノ懃カラス若シ果シテ天災ナランニハ假令
鬼神ニ祈リ又ハ金鼓ヲ鳴シテ奔走ルトモ豈之ヲ防キ得ル
ノ理アラソヤ思サルノ甚シキモノトイフヘシ但シ蟲送リ
ノ際炬火ヲ點スルハ其効懃カラス宜シク時ヲ計リテ此法
ヲ行フベシ然レトモ持廻ルハ良シカラス抑物ノ害ハ既ニ
發シタル後ニ除クコトハ難ク未タ萌サル内ニ防クハ易キ
モノナレハ一蟲一蛾ヲ認ナハ速ニ之ヲ殺シ良トス若シ之
ヲ等閑ニスルトキハ其子孫次第ニ蕃殖テ大害ヲ成シ容易
ク除クコト能ハサルニ至ルモノナリ夫蠅蟲ノ如キ其初ハ僅
ニ二三ノ稻莖ヲ害スルニ過サレトモ捨置テ驅除ヲ怠トキ

ハ忽蔓延テ竟ニ先年青森熊本兩縣下ノ如キ慘狀ヲ看ニ至
ベシ實ニ懼ヘキコトナラスヤ陸羽地方ニテハ古ヨリ毎歲
中元ノ頃俗ニ「マツビ」ト稱ヘ家々ノ庭前又ハ門前等ニテ每
夕松薪二三策ヲ焚シ慣例アリシガ維新後ハ無用ノ事ナリ
トテ之ヲ廢止タリトゾ然ルニ爾後年々蟲害ノ多キヲ見テ
人々始テ昔人が蟲害豫防ノ爲ニ設ケ置キタル便法ナルコ
トヲ覺リ二三年前^前ヨリ有志數名相謀テ平常枯葉草芥ノ類ヲ
貯ヘ置夏季害蟲ノ羽化セシ頃毎夜田圃ノ間等ニテ之ヲ焚
ニ此火中ヘ羽蟲來リ入りテ燒死モノ夥ク大ニ豫防ノ効驗
アリト聞キ及ヘリ此法ハ啻害蟲豫防ノ効アルノミナラス
其燼餘ノ灰ハ之ヲ田圃ノ肥料トナスベク無用ヲ轉シテ有
用ニ歸スルノ益アレハ他郷ノ農家モ宜シク之ヲ實驗スベ

シ尤母蟲ノ羽化^ハテ卵ヲ産ムハ大抵四月上旬ニ始マリ九月下旬ニ終ルモノナレハ毎歲豫テ各自所有ノ園圃山林等ノ間ニ枯葉草芥ノ類ヲ積置テ害蟲ノ生スル期節前ニ一二週間毎夕日没ヨリ十時頃マデ蟲害アル園圃ノ邊ニテ之ヲ焚ヘシ初年ハ直接ニ母蟲ヲ燒盡コト能ハザルヘケレドモ自然他ノ母蟲ヲ除クコトヲ得ヘシ斯ノ如クシテ毎年怠コトナケレハ害蟲次第ニ減スルノミナラス竟ニハ羽化ノ期節ヲモ知ルコトヲ得テ此害ヲ未萌ニ防クコト最容易ナルヘシ尙此他平素^{キヤツツ}注意ヲ害蟲ヲシテ子遺ナカラシムルニ至ラハ畜ニ農家ノ益ノミナラス實ニ國家ノ幸福ナリ而シテ此幸福ヲ得ルト否トハ唯勉ムルト勉メサルトニ在ルノミ農家タルモノ意ヲ此要點ニ留メサルヘケンヤ

明治十六年四月

三河國產馬改良頓末大畧

本縣三河國南北設樂東西加茂四郡ノ地方々々從來產馬ノ數多ク^{四郡牝馬ノ數}又牧草ニ富ムト雖馬種^{體軀矮少筋力}軟弱重荷使用ニ堪ヘズ乘馬挽馬ニ適セズ故ニ之カ改良ニ着手セシハ明治十年中舊縣令安場保和ノ勸獎誘導ニ起リ當時十四區長^{今ノ北設樂郡ナリ}勸業課員等拮据周旋ヒシニ由リ翌十一年四月ニ至リ北設樂郡ノ有志者奮起計畫スル所アリ同郡稻橋納庫津具黒川等ノ產馬部落三十六ヶ村團結南部地方^{眞牝馬五十頭ノ購入方及ヒ}良壯馬數頭貸下ノ義ヲ本縣ニ請願シ此際南設樂郡愛郷村ノ有志者亦種馬牝壹頭牝

五頭購入方ヲ委頼セリ此ニ於テ該馬及ヒ縣用牡馬七頭購
 入ノ爲メ本縣五等屬奥田賢英等ヲ三陸地方へ派遣セシム
 同年九月賢英等購入馬匹ヲ牽キ歸ル則チ牝牡五拾餘頭ハ
 請求人民へ分配シ縣用牡馬七頭ハ北設樂郡夏燒村ニ産馬
 學校ヲ建築シ之ニ飼畜セシメ人民ノ求ニ應スルノ交接種
 馬ニ充ツ而シテ産馬學校ハ一般改良馬匹ヲ惣管シ改良ノ
 標準トナリ且ツ生徒ヲ募集シ飼養ノ法ヲ傳習セシムル所
 トシ奥田賢英ヲ出張セシメ該校ノ主事トシ兼テ教育ヲ掌
 トラシム又北設樂郡ノモノ二三名ヲ舉ケテ學校係トス此
 年軍馬局ヨリ胤馬四頭ノ貸下ヲ受ク是亦該校ニ飼畜セシ
 ム

同十二年二月産馬學校ヲ改メテ産馬講習所ト稱セシム

同年三月ヨリ講習所飼養ノ胤馬人民ノ請ヒニ任セ北設樂
 郡各村ヲ牽キ回リ交接セシム此ノ如ク牽キ回リ交接セシ
 メタルヲ以テ牝馬春氣ヲ發スルノ時期ヲ過マリ膿胎スル
 モノ少シ人民之ヲ覺ラズ漫リニ交接法ノ惡シキニ由リタ
 ルト妄信シ非議スルモノ尠ナカラズ

同年四月改良馬匹血統証ヲ製シ改良馬兒ノ分娩シタルモ
 ノハ付與ス

因云爾來此証ノ信用空ニカラズ此証ノ有無ニ由リ幾分
 カ價格ヲ増減ス

同年六月講習所ヲ北設樂郡段戸山四辻字平ニ移ス之レ夏
 燒村ハ秣藪ニ乏シク冗費尠カラズ土地狹隘馳驅ヲ試ムル
 ニ便ナラズ段戸山ハ郡内ノ大山ニシテ山阪險峻ナラズ滿

山美良ノ牧草ニ富ミ清溪縱横流通シ尤モ牧馬適當ノ地ナ
 リ故ニ此ノ移轉ヲ爲ス
 同年七月己后縣會於テ講習所費ヲ廢シテ補助費ト改ム此
 ニ於テ北設樂郡產馬改良着手ノ三拾六ヶ村ニ委託シ從前
 ノ事業ヲ繼續セシメ舊ニヨリ奥田賢英ヲ講習所ニ出張セ
 シム

同十三年春前年交接手續キニ懲リ北設樂郡產馬改良部落
 三拾六ヶ村ヲ五部ニ分チ各部ヘ抽籤ヲ以テ胤馬ヲ分遣シ
 交接セシメタリ故ニ牝馬春氣發生ノ期ヲ過マラズ果シテ
 腹胎スルモノ多シ且此春始メテ改良馬兒ヲ分娩スルヲ見
 ルニ其骨格皮相在來種ノ儔ニ非ズ其價五割又ハ六割ヲ増
 シ或ハ加倍フルモノアリ此ニ於テヤ人民改良ノ實益ヲ認

メ皆改良ノ點ニ歸向シ前日非難スルモノ却テ率先盡力ス
 ルニ至ル

同年秋人民ノ請求ニ應ジ講習所養フ所ノ胤馬ヲ北設樂郡
 各部ヘ貸下ケタリ

同十四年春產馬改良ノ影響南北設樂東西加茂四郡產馬部
 落一般ニ推及シノ人民大ニ奮起シ四郡協議南部產種馬購
 入方及ヒ軍馬局勸農局等ヘ種馬貸下ノヲテ本縣ヘ願ヒ出
 テ終ニ數十頭ノ種馬ヲ輸入セリ

同年一月ヨリ講習所ハ南北設樂東加茂三郡ノ維持スル所
 トナル而シテ三郡中產馬部落ニ惣代ヲ置キ產馬各村ニ委
 員ヲ設ケ一年春秋兩回產馬會ヲ開設スルトス
 同年五月農商務省ヨリ產馬資金トシテ本縣ヘ金七千圓貸

下ケラレタリ之ヲ更ニ南北設樂東加茂三郡人民ノ請求ニ
 應シ講習所維持資金トシテ貸下ケタルヲ以テ講習所事業
 ナ擴張シ新ニ廐舎ヲ建築シ改良兒馬牡十數頭ヲ買入レ飼
 畜ス

郵便報告

我政府郵便法ヲ施行セラル、ヨリ其社會公衆ニ便益ヲ與
 フルノ鴻大ナル今更喋々ヲ待タザル所ナリ實ニ本縣下郵
 便事業ハ日ヲ逐フテ進モシ其信書及新聞紙發着等ノ數ヲ
 算スルニ十四年ハ十三年ニ比ヘ平均四割八歩強ヲ増シ十
 五年ヨリ十四年ニ較レバ又三割強ノ増加ヲ致セリ即チ其
 増加スル所以ノモノハ法規年毎ニ改メラレ益ス其簡便ヲ
 得ルニ因ルナル可シト雖モ亦以テ人智開進ノ度ヲ徴スル

ニ足ルモノアリ即チ統計比較表ヲ製シ左ニ掲ク

明治十四年愛知縣郵便局等員數比較表

件名	年度		増減
	十四年	十五年	
郵便局	一位 一五九	一位 一五九	
郵便爲替取扱所	四三	四三	
切手賣下所	一、八一〇	一八一〇	
函場	一、七四七	一七四七	
柱函	五四	六一	七
線路里程	三三九	三三八	-
全往復延里程		八五二	

貯金預所

六〇

六〇

二十

明治十五年愛知縣各局郵便取扱員數種別比較表

件名	十四年		十五年		增減	分增 分減
	一位	一位	一位	一位		
差立書狀	一六九一、七六五	一九一〇、三〇九	二二八、五四四	六、七四三		一割二分強
全書留	五三、九三三	六〇、六七六		三、四二三		三分強
全無稅	一〇八、二七一	一一一、六九四		三三、二六一		一割七分強
全新聞及雜誌	一八一、八三五	二一四、〇九六		三三、二六一		一割七分強
全書籍見本	六三、九五二	九二、六六八		二八、七二七		四割四分強

全棄書

八八三、八七八

一一〇六、九六五

二二三、〇八七

二割五分強

全金子入

三、八四四

二、九五五

八八九

二割三分強

配達書狀市內

二二三四、一七五

二七三八、七三〇

五一四、五五五

二割三分強

全市外

七五〇、一四七

九六八、二四〇

二一八、〇九三

二割九分強

全書留書狀市內

一五、九八一

四三、九五二

二七、九七一

一倍七割五分強

全市外

一〇、一七

七、〇六〇

三、〇五七

六割九分強

全別配達

二、四六四

一、九三〇

五三〇

二割一分強

全別仕立

三、〇一一

六九五

二、三二六

七割六分強

全自局到達留置

八三、一七八

九九、一〇七

一五、九二九

一割九分強

為替振出高

二六七、四〇九

九六六

三三一、五六二

〇一五

六四、一五二

〇四九

二割三分強

二十一

全拂渡高	二九一、九三九	三四三	三三〇、五三三	八三二	三八、五七三	四八八	一割三分強
貯金預高	一六、六一六	九一五	一九、六二八	三七二	三、〇一一	四五七	一割八分強
全拂戻高	九、四四六	三七二	一四、三九七	〇二六	四、九五〇	六五〇	五割二分強
郵便切手賣下代	二五、五七五	〇九六	四〇、四四七	九〇〇	一四、八七二	七〇四	五割八分強
葉書賣下代	五、七五八	二二二	一〇、五六九	七四九	四、八一一	五二五	八割三分強
角形封皮賣下代	四	〇四〇	一八	一三七	一四	〇九七	二倍四割八分強
長形封皮賣下代	一三四	四九三	一一三	三二七	一	一六八	厘強

小形旅客漁船ハ十五年十二月ノ調査ニ於テ船數六艘噸數百七十九噸ナリ之ヲ十四年ニ比スレハ二艘百廿二噸ヲ増セリ如斯増加スルニ隨ヒ民間ニ於テモ稍其便ヲ覺リ乗客

ニ至テモ亦漸次多キヲ加フルノ景況ナリ然ルニ其船舶タル概テ古船ニ姑息ノ修繕ヲ爲シタル脆弱ノモノ多ク加之船數ノ増ニ隨ヒ互ニ漁力ノ廢ヲ失シ競争駛行ノ弊ヲ生シ爲メニ先害ヲ惹起サントスル懸念アルヲ以テ三重岐阜兩縣ト協議取締規則ニ一層ノ嚴密ヲ加ヘタレハ其弊ヲ豫防スルニ足ルコトハ確信スル所ナリ且輓近其業ニ従事スル有志者ニ於テモ此ニ着意シ同業者共同シテ取締ノ方法ヲ立テ漸次堅牢ナル船舶ト換ヘントスルノ企テアリテ既ニ其實効ヲ見ルニ至リタレハ好結果ヲ見ルノ近キニアルハ信シテ疑ハザル所ナリ

西洋形風帆船ハ同時ノ調査ニ於テ般數二十一艘噸數二千九十六噸ナリ之ヲ十四年ニ比スレハ九艘千十六噸ノ増加

チ致セリ之レ畢竟從來日本形船ニ比シ其便ナルヲ覺リ改良ニ赴クノ徴効ニシテ將來運搬業ニ於テ著シキ進歩ヲ見ルハ疑ヲ容レサル所ナリ
 日本形船ハ同時ノ調査ニ於テ五十石積以上船數九百四十五艘積石二十壹萬四千三百三拾四石ナリ之レヲ十四年ニ比スレハ二十八艘壹万五千八百廿六石ヲ減セリ之レ畢竟前條同情ニシテ造船法ノ改良ニ向ヘルヲ証スルニ足レリ

明治十五年船舶員數比較表

西 蒸	船 數	件名	
		年 度	減 增
		十四年	四
		十五年	六

日	形 洋		計 總		帆 風		氣		噸 數
	石 五 百	以上 千 石	噸	船 數	噸	船 數	全 上 噸	他縣下ヨリ管 中當縣ト二 縣留ノ分總計ニハ省ク 噸 數	
	船 數	船 數	噸 數	船 數	噸 數	船 數	噸 數	噸 數	噸 數
	一、一三	三三、三五八	二九	一、一三七	一六	一、〇八〇	一三	一〇一	一七九
	一〇四	二六、八四一	二五	二、二七五	二七	二、〇九六	二一	一〇一	一七九
	九	五、五一七	四	一、一三八	一一	一、〇一六	九	一〇一	一一三

計	總	形			本		
		以上	五十	以上	百石	以上	
石	船	石	船	石	船	石	
數	數	數	數	數	數	數	
三三〇、一六〇	九七三	二七、八五九	四〇七	八三、八一	四二	八六、一三二	
二二四、三三〇	九四五	二七、七六五	四〇六	八一、二二八	四一	七八、五〇〇	
一五、八二六	二八	九四	一	二、五八三	一四	七、六三二	

尾張宮重大根種子販賣廣告

古來世ニ尾張大根ト美賞スルハ則本郡產出ノ宮重大根ニシテ其名ヲ全國ニ博クスルハ世人ノ能ク知ラル、所ナリ

然ルニ正眞宮重大根ハ近隣海東郡方領村產ノ青白肥大ナルモノニ異リ形チ少ニシテ其味ノ甘美ナル譬フルニ物ナシ既ニ同盟者ノ内第二内國勸業博覽會ニテ褒狀ヲ拜受セリ右種子作り立てノ方法ハ大根引入ノ際其良質ヲ撰ミ肥土ニ植附ケ風雪ヲ防キ充分施肥耕作ヲナシ翌年六月種ヲ取ルモノニシテ其手數容易ナラス因テ是迄正眞ノ良種ハ多分產出セザルヲ以テ各府縣御廳ヲ初メ其他ノ請求ニ應ゼザル事アリ然ルニ蒔立テ種ト稱シテ秋季土用ヲ待テ實蒔ニスレハ極メテ煩勞ヲ省キ且植付ケ種ニ三倍ノ收穫アリ然リト雖正眞ノモノニ比スレハ性質鹿惡ニシテ風味モ亦大ニ貶劣ス因テ當地方ニ於テハ決シテ用ヒザルモ利ヲ貪ルノ商人多クハ此種ヲ以テ他方へ販賣シ又古種ヲ

混合スル等種々不良ノ策ヲ爲シ終ニ宮重ノ美名ヲ墜スニ
 至ルハ實ニ遺憾ニ付今般同盟相謀リ官ノ許可ヲ得西春日
 井郡宮重組ト稱シ精撰良種ヲシテ廣ク購求ニ應シ物産繁
 殖ノ一端ヲ開カムトス乞フ正真ノ宮重大根種子望ノ諸君
 ハ左ノ手續キニ因リ組元又ハ取次所へ申入レアリタシ
 種子入用ノ諸君ハ其數量住所姓名ヲ詳記シ毎年十月迄ニ
 御申込アリタシ然ルトキハ翌年五月成熟ノ概況ヲ以相場
 相定本年種子代價凡御報及フベキニ付速ニ代價御送付相
 成度右金到着次第直ニ種子回送スベシ尤遞送費ハ着荷ノ
 上御拂アリタシ
 當組ハ注文外ノ種子ヲ作ラズ然レドモ一升以下ノ種子ハ
 侍付ケ前タリトモ請求ニ應ズル事アルベシ

當組ハ種子賣捌人ヲ一切差出サズ取次賣リ志望ノ方ハ其
 旨御照會アレ

愛知縣下尾張國西春日井郡
 下小田井村五百三十一番地
 西春日井郡宮重組

尾張宮重大根栽培法

土質 砂交リ眞土

播種之季節及手續 季節ハ立秋ヨリ三十日目位ヲ適應ノ
 時トス時時ハ各地相異ナルヘシ他方ニテ此大根ヲ時カ
 其地拵ハ深ク耕シ土ヲ能ク細カニシ凡ニ尺幅ニ畦取リ
 其畦へ凡ソ壹尺五寸隔テニ足跡ヲ付ケ畝歩ニ付凡三
 百五十足ヨリ四

百足迄テ其足跡ノ真中ニ木ノ棒丈ケ四尺圍リ四寸五分ヲ尖ラシタルモノノ見込ニテ深サ貳寸程ノ小穴ヲ穿テ其穴ヘ細末ノ種糶又ハ鰯糶壹畝歩五升ヲ一摺ツ、其穴ニ配リ土ヲ薄ク覆ヒ其上ヘ汚水升目凡三斗五升見込皆同シヲ洒キ其穴ノ前後ニ種子拾粒計リ播下シ又薄ク土ヲ覆ヒ其上ヘ日ノ照リ付ケ並ニ大雨ヲ防ク爲メニ藁又ハ粟黍稗等ヲ以テ蓋ヲ爲スヘシ

發芽后培養之法 播種後凡ソ三日目ニ發芽ヲ待テ夕方蓋

ヲ除キ其后五六日ヲ經テ不良ノ苗ヲ拔立テ根元ヘ粉土ヲ寄セ汚水ヲ灌キ見込壹畝歩壹荷ノ又五六日ヲ隔テ畦ノ腮ヲケヅリ壹畝歩ニ水肥人糞二分ニ汚水八分ヲ加ヘタカモノ貳荷ニ種糶又ハ鰯糶壹斗ヲ混和シ之ヲ施シ其後二十日程モ過キ畦

ヲ返ス拔立ハ二ツ葉ノ内ニ疎ク五本立チニ致シ其後追々ニ拔立テ下種後三十日位迄ニ一本立トスベシ早クニ本立ニセサレバ又水肥ハ壹畝歩ニ貳荷程ツ、秋ノ土用迄ニ三四回施スヘシ

培養上左ノ廉々注意スヘシ

- 一肥ハ摺粕類糞尿トモ都テ根元ヲ少シ隔テ、施スヘシ
- 一肥ノ爲ニ青黴ニナリタルキ方言「コヤマ」蟲ト云小蟲發
- 生スルモノナレバ早ク青黴ヲ除クヘシ
- 一「コヤマ」蟲等ノ發シタル時ハ朝露ノ乾カサル内ニ
- 藁灰又ハ粉土ヲ撒布スヘシ

採収 冬至十日前ヨリ冬至迄ヲ適度トス壹本ノ目方三百五十目位ヨリ四百目位迄

種大根栽培法 種子採リニハ採収ノ節精良ノモノヲ擇撰
 シ之ヲ移植スルハ畦間株間等蒔付ケノ節ト同シク壹株
 毎ニ穴ヲ堀リ葉莖マテ地ニ埋ノ藁ヲ上ニ覆ヒ寒凍ヲ防
 キ其后十日ヲ隔テ株毎ニ小穴ヲ穿テ其穴ニ種糶又ハ糶
 糶貳合位ツ 配リ水肥壹畝歩三荷ヲ施シ翌春新芽ノ發
 スル節又同上ノ肥料ヲ施シ耕耘ス春彼岸頃尙水肥步三
 荷ノヲ施ス小暑ノ候莢子ノ淡黄色ニナルヲ適度トシ苺
 見込 採リ陰乾ニス

農談會報告 「前号ノ續」

植物虫害病患豫防并ニ驅除
 編者曰ク古人言ヘルコアリ水而得ニ一邱一垤旱而得ニ一井一

池即單寒孤子聊足自救惟蝗則不然必藉國家之功令必須百
 郡邑之協心必須千萬人之同力一家一身無獨力自免之理此
 又與水旱異者也總而論之蝗災甚重除之則易必合衆力共除
 之然後易耳ト今ヤ各郡農會ノ報告ヲ閱スルニ其之ヲ驅除
 スルノ方ニ於テヤ頗フル詳悉セリ然ルニ其施行ノ法ニ至
 ツテハ蓋シ之ヲ講スルモノ鮮シ是甚ダ怪ムヘキナリ夫レ
 蝗災ノ恐ルヘキ壹反壹畝ニ止マラズ一郷一郡ニ亘リ其害
 ノ重キト古人ノ言ノ如キモノ往々之アリ竊ニ各農會ニ望
 ム適宜驅除ノ準備アラソク又古人言ヘルコアリ天ノ未
 ダ陰雨セザルニ及ソテ隔戸ヲ綯繆スト夫レ之ヲ省セヨ

綿之部

額田郡秦梨村畔柳半七 綿作ニ發生スル「チヤウ」虫ハ大
 ヒナル害アルモノナリ之レヲ豫防スルニハ椿ノ花ヲ拾
 ヒ集メ之ヲ燒テ灰トシ下種ノ際一種子ヲ右ノ灰ト摺ノ
 摺^ニ摺^ガ水ニ交テ攪拌シ乾燥ヲ待テ播種スルチ宜シトス然
 ルキハ該虫ノ害ヲ免カルコト余ガ數年試驗シテ其功ア
 ルチ知ル所ナリ

額田郡岡崎能見町大垣津音藏 綿種ヲ播下スルニハ播種
 前水肥ヲ施ス「ハ常ノ如ク」コシテ綿實ヲ摺^ニ摺^ガ水又ハ人
 尿ニ一夜浸シ而シテ細末ノ硫黃ヲ撒布シ之ヲ播下シテ
 灰ヲ施シ蓋土ヲ掛ケテ踏付薄キ水肥ヲ壹荷ニ細末
 ノ硫黃壹合五夕ヲ混和シテ灌注シ少シク發芽シタルキ
 土ヲ覆フトキハ生立ヨシ

西加茂郡猿投村柴田與市 綿實ハ寒中ニ氷ヲ吹キ掛ケ一
 夜凍ラシ置キ播種前米糠ニテ漸^ニ漸^シ二日位休マセ摺^ニ摺^ガ水
 ト煤ニテ漸シ蒔片ハ蝶虫ノ害少ナシ
 西加茂郡大草村鈴木彦市 綿^ニコト云フノ病ヲ醸スルハ
 椿ノ花ヲ干シ置キ之ヲ粉ニシテ綿ノ根元ハ振り而シテ
 少シ土ヲ掛ケ置ケバ大ニ功ヲ奏スルモノナリ
 東加茂郡酒呑村佐藤甚五郎 綿ノ蝶虫豫防ニハ鰻ノ骨又
 ハ頭ヲ畑ノ畔風向キヨロシキ處ニテ燒ケハ其憂ヒナキ
 ナリ
 東加茂郡中之御所村加藤半造 綿ノ蝶虫豫防ニハ生立七
 八寸ニナリタル時小麥葉ノ灰ヲ朝露ノ乾ヌウチ芽ニ振
 リカクレハ蝶虫及小虫^ハ方言^コノ憂ナキ「數年ノ實驗ナ

額田郡岡崎能美町大垣津音齋 霖雨ノ候綿ニ方言銀虫ト云モノ生スルコトアリ之ヲ驅除スルニハ蕎麥殼ヲ根ニ撒クヘシ

同 凡綿虫ノ生シタルキ蓬ノ煎汁壹斗石灰貳百目硫黃貳百目ノ量ヲ混和シ之ヲ施スルハ虫害ヲ除クコト妙ナリ

西春日井郡鍋屋上野村長谷川彌右衛門 廿年來經驗スルニ綿ノ立枯ヲ防グハ葉烟草ノ骨ヲ水ニ浸シアクテ出タシ其水ニテ綿種ヲカシ煤又ハ灰ヲ交セテ蒔ケハ立枯スルコトナク虫害モ少シ

西春日井郡井瀬木村熊澤勇齋 四五年經驗スルニ綿ノ生コト少々ツ、入ル、チ宜トス又根元ニアマリ近ク肥ヲスレハ霖雨ノ節根カ腐リ虫害モ多キモノナレハ根元ヲ隔テ、施スチ善トス

西春日井郡杉村箕浦岩次郎 虫害ヲ防グ爲メ綿實ヲ灰ニ交ヘテ下地ニ石灰ヲ少シ敷クチ可トス前へ耕シハ淺クシテ蒔付ハ高クシ生へ出テ、油粕ヲ施スチ宜シトス

寶飯郡深谷勘三郎「白テン」ノコト云フ白キツブ「ノ付タルハ酢ヲ笹ニテ振り掛クレハ去ルモノナリ

同 「コ、メ虫」ノ付タルキハ葉蕎麥 下人ノ食スヘキチ篩チ以テ撒布スル宜シ

寶飯郡中島光三郎 「テン」ノコト發生セハ朝露ノアル時ニ灰七分米糠三分ヲ和シ葉へ撒布スヘシ

蔬菜之部

北設樂郡川向村蘆山榮次郎 水肥壹荷ニ菜種油三夕程ヲ

合セ大根ノ頭アタマヨリ日中ニ施セハ虫ヲ驅ル可シ

同郡田内村林善十 大根ヲ蒔ニハ三日前其種ヲ暫時荏油

ニ浸シテ蒔トキハ虫害少ナクシテ肥料ニモナルナリ

同郡下津具村熊谷淺吉(ナシヤ)木ノ實ヲ能碎キ之ヲ水ニ

浸シヲキ其水ヲ大根ニ注ク時ハ虫害ヲ防キ生立モヨロ

シ

額田郡岡崎能見町大垣津音藏 茄子ヲ植付ル十二三日

前ニ穴ヲ掘リ埋肥トシテ水肥(人糞壹荷風呂水三荷台セ四

ヲ十分ニソギ込オキ植ル時一ツノ穴ニ石灰壹合入レ土

トヨク交セ苗ノ立根ヲ切り根ノ下ニ下等ノ硫黃粉壹匁

二三分ツ、入レ植込ニ根付ク迄葉アル木ノ枝ヲ以テ日

除ケヲ爲スヘシ

葉イタミ見ユルトキハ硫黃壹合石灰三合畑土七合水

ニテドロクニ交セ根ヲユスリテツギ込ニ踏ミ付ヘシ

又味噌汁ノ冷タルモツギ込ニテヨシ

葉ニ虫ノ付タルハ少シ温タカミアル風呂水ヲ夜分葉

ニ多分掛ケテ宜シ

同 瓜南瓜西瓜ヲ播種シテ二ツ葉ノ頃虫害ニ罹ルニ甚タ

多シ之ヲ防カント欲スルニハ朝露ノ濕ヒアル内細末

ノ硫黃ヲ其二ツ葉ニフリカケル片ハ害虫ヲ免ル、モ

ノナリ

海東郡草平新田祖父江九平治 茄子根際ヨリ倒ル、ニ付

拙者ノ實驗ニ因レハ二番結實ノ癖ナキモノヲ撰ミ又苗
本畑ニ移植ノ際根土ヲ氷ニテ洗ヒ而シテ立根ヲ四五
分伐リ掘リ植付レハ生育ノ后一番結實ハ稍ヤ遅シト雖
モ虫害ノ憂ナシトス

西加茂郡寺谷下村石川兼次郎 芋（里芋唐芋等）ヲ作リシ跡ハ茄
子苗ヲ栽ルコトヲ忌ム花ノ咲ク時ニ至ツテ忽チ枯ルモ
ノナリ

西加茂郡東枝下村鈴木喜平 茄子ハ豌豆并ニ煙草ヲ作リ
シ畑ニ植レハ蛆蟲多クシテ害ヲ得ルコト少ナカラス

西加茂郡三箇村加藤熊平 茄子苗ニ飛虫ノ發生シタルハ
ハ田螺ヲ碎キ氷ニテ溶キ晴天ニ之ヲ灌クヲ良トス

西加茂郡東市野々村松井勘三郎 茄子苗ニ飛虫等發生シ

タルニハ鱧骨五百目ヲ粉トシ汚水ト混和シテ午后六時

頃ニ施セハ右ノ虫退散シテ苗ノ生長方大ニ良シ

東加茂郡中立村吉田茂八 茄子木ノ枯ル、ニハ荒布ヲ其
儘茄子ノ根元へ埋メ日中ニ清酒ヲ少シツ、霧吹管ヲ以

テ吹注グハ自然ニ勢ヒチ加エ枯レヌナリ

東加茂郡有間村後藤太造 佛掌薯（ツク子イモ）ニ（ホタル虫）ノ生シタル
時之ヲ驅ルニハ硫黃花二分 白芥子粉 五分 石炭油二分右

ヲ水一升ノ内へ入レ能ク攪拌シ竹製ノ水彈ニテ注キカ
シレハ必ス死スルナリ

東加茂郡平折村大河原斧作 蕪苗ノ虫害ヲ防クニハ蒔付
ノ節蕎麥稈ヲ燒キ末タ煖氣ノ去ラサル内其熱キ灰ヲ水

肥へ混交シテ根肥ニ爲セハ虫害少キコト數年ノ經驗ナリ

東加茂郡黒坂村鈴木喜代次郎 茄子ノ枯レルニハ馬酔木
 〔方言アセ〕ヲ煎シ其汁ヲ晴天ノ日中ニ茄子ノ根ヘ灌ケハ
 右ノ害ヲ防クヲ數年ノ實驗スル處ナリ
 額田郡岡崎能見町大垣津音藏 茄子ヲ毎年一耕地ニ植ル
 キハ漸ク成長シタル頃幹根瘠弱シテ枯死スルモノアリ
 是前年ノ舊根ニ新根ノ銜接シ腐敗スルガ故ナリ此ノ患
 ヲ除ントセハ寒中ニ其畑ヘ石灰ヲ入レ深ク耕耨シ置ク
 ヘシ然ル片ハ舊根腐消シテ害トナルヲナシ
 同 西瓜ノ如キモ結菓ノ大サ茶碗許ニ至テ枯ル、トアリ
 此亦前法ノ如ク耕耘ヲ施スヲ長トス
 愛知郡山口村淺野作左衛門 大角豆ノ虫ニハ漆ノ枝ヲ折
 テ所々ニ挿置テ良トス

愛知郡藤枝村鈴木伊八 大角豆ノ虫ニハ黒菜ノ汁ヲ散布
 スルモ亦可ナリ
 愛知郡鳴海村坂野儀平 蘿蔔ノ虫ニハ棟葉又ハ蓬ヲ煎シ
 肥シニ交セ撒布スレハ忽消滅スルナリ
 寶飯郡深谷勘三郎瓜ノ葉ニ赤虫ノ付キタルヲ驅ルハ椿實
 油糟又ハ石灰ヲ篩ヲ以テ撒布スレハ去ルモノナリ
 八名郡荻平村鈴木新助 茄子ノ〔サル〕虫ヲ驅除スルニハ鰻
 ヲ畜ヒシ水カ或ハ鰻料理ニ用ヒタル水ヲ灌ケハ效驗著
 シキモノナリ
 八名郡小野田村鈴木源六 菜蔬ノ類ヘ「コ、ノ」虫ノ生シタ
 ルハ煙草葉ノ莖カ馬酔木ノ葉ヲ煎シテ澆グヘシ若シ
 一度ニテ功ノ著レザルトキハ二三度モ施スヘシ必ス功

驗アルモノナリ

八名郡多米村高松民藏 菜蔬ノ類ニ虫害ヲ生シタル時ハ
鱧ノ頭ヲ能ク乾シ置日中ニ風上ニテ薰ラスレハ驅除ノ
功アルモノナリ

同郡同村中神太市 蘿蔔葉ニ黒キ虫ノ生シタル時ハ茅屋
ノ雨垂水ヲ腐ラシ置キ之レニ石灰ト明礬ヲ少シツ、入
レ朝夕笹葉ニテ洒クベシ

十五年山林共進會畧鈔

但市川甚左衛門功績ノ存スル地ハ多ク長野縣ナルヲ以
テ列品ノ時ニ際シ同縣へ移スト雖モ出品主及調査等本
縣ニ係ワルヲ以テ掲載セリ

舊名古屋藩故市川甚左衛門

右甚左衛門曾テ木蘇材木奉行ヲ勤ノ大ニ木曾山林保護ノ
方法ヲ改良セリ惜哉當時ノ書類散逸其行事ヲ詳悉スル能
ハス然レモ五木禁伐等ノ事其功績章ニ今尙見ニ足ル十五
年春同人孫正忠山林共進會へ出品同會於テ一等賞ヲ興へ
ラル同人履歴並付録左ニ

正忠三代祖市川甚左衛門(延寶七年己未年)元祿四年未十二

月新規領主謁見同六年酉二月元服同七年戊十二月廿六

日御隱居付(徳川家二代目瑞龍院殿)五十人組ニ被召出切

米拾七石ニ三人口ヲ賜ル同十二年卯十一月錦織村在番

(木曾村木ノ)中略 寶永三年戊四月廿二日木曾山元詰ニ

出張同四年亥六月廿一日上松奉行被申付(木曾山方ノ)同

年七月任所へ赴ク中略同五年子四月朔日濃州三ヶ村付知川上母ノ内川上村へ到着三ヶ村ノ諸山巡檢畢テ同十四日加子母村發木曾山元へ着山見回リノ享保九年辰十一月十九日本曾檢地御用被申付數日間格別骨折其後七宗山へモ罷越出精云々爲其賞銀子七枚賜之以下藩主ヨリ銀子其它賜物數十度ニ付零ス同十年己三月川上付知加子母ノ三ヶ村田畑爲内改命ニヨリ出張同年十二月十六日濃州錦織港ニ材木留ノ藤綱張置タルニ近年度々押切レ材木川下へ流レ失木不少ニ付右綱場ニ於テ木蘇山元ニ有之通留梓出來方可然ニ依リ出張被申付レタリ同十四年間九月山元用務數年來相勤近年上松福島ノ用務等前々ノ致方ヲ切替末々迄爲筋能様ニ勤弁仕出精相勤候

段勤功格別ヲ以テ新知百五拾石賜之同十五年七月三ヶ村付知加子母之儀向後大代官支配相止治民大代官甚左衛門一圓支配可致旨被申渡 元文五年申二月數年木曾山元用務功者ニ官山大切ニ取扱其外濃州於テモ官山ノ用務及ヒ年來上松方ノ用務ヲ兼テ福島ニモ相詰谷中ノ用務立合治民山村甚兵衛出精相勤其上久々三ヶ村付知川上母加役ヲモ骨折勝面勤勞ノ廉ヲ以テ加増知五拾石並足高五拾石都合貳百五拾石ヲ賜ヒ馬持ト相成役名ヲ木曾材木奉行ト被申付レタリ木曾材木奉行寛保三年亥二月老年ニ及ヒタルヲ以木曾山元見廻リヲ免セラレタリ此時同役ニ林治右衛門ト云ヲ置レタリ二人役ノ延享二年己八月木曾用務累年出精宜相勤候旨ヲ以テ足高五拾

石都合三百石ヲ賜ヒ岐阜奉行へ轉寶永三年木曾山元詰ノ初度ヨリ延享二年迄四拾ヶ年間無間斷山林ニ從事シ施行シタル事業ハ夥多現在シタル由ナレト當時ノ書類存在スルモノ僅少故ニ其大意ヲ摘記シタルノミ寶曆七丑年四月廿三日七拾九歳ニシテ死ス 履歷

蘇山ハ曆應年ヨリ木曾家世々ノ所領ナルニ豊臣氏ノ代ニ至リ蘇山ノ良材ヲ稱スル者アルニ由テ秀吉乃チ木曾義昌ノ封ヲ下總ノ綱戸ニ移シ犬山城主石川備前ヲシテ之ヲ支配セシム此時關ヶ原ノ役起ルヤ木蘇家ノ舊臣山村甚兵衛關東ニ乞フテ西軍ヲ討ツ木曾口ノ進撃ヲ命セラル將ニ發セントス木曾ノ人民箠食壺醬ニテ迎リ熱川ノ砦守ヲ棄テ走ル犬山ノ城主之ヲ聞テ又走ル事平クニ

及ンテ功ヲ以テ山村甚兵衛ニ賜フニ木曾ヲ以テス固辭乃チ豊臣氏ノ義昌ヲ移スノ例ニ倣ヒ壹萬六千貳百石ヲ美濃ニ賜フ木曾ノ代官タラシム命シテ曰蘇山木材ノ事一ニ石川備前ノ則ニ從フヘシト且毎木板子數千枚ヲ甚兵衛ニ賜此板子ハ御免元和年中尾張ノ義直ニ屬セラル而シテ義直甚兵衛ヲシテ代官タラシムルヲ如故徳川氏ノ中世木曾ノ人民法ヲ犯ス者多シ之ニ因テ享保年中山村甚兵衛ノ職務ヲ解キ山林監守是ヨリ先キ寛文中上市川甚左衛門ヲシテ之ヲ兼チシム爰ニ於テ木曾山ヲ三ツニ區分ス即チ留山巢山明山是ナリ只明山ハ五種ノ伐木ヲ禁シ其餘ヲ人民ノ自由ニ任ス加之板子ノ租ヲ更メ米粟ニ換フ其他改良スル處多シ后六年甚兵衛ノ職ヲ復

セラル、モ山林保護ハ甚左衛門ノ司ル所ナリ爾來樹木ノ發育ニ尽力シ斧斤時ヲ失ワス良材養護ノ法ヲ得タリ云々 付録

明治十三年十月十八日出板届

愛知縣藏板

終